

《西洋史研究室の現在》

新任教員の紹介

講師 安平 弦司

2023 年 4 月 1 日付けで京都大学大学院文学研究科に講師として着任致しました。西洋史学専修で、特に近世史に関する研究・教育に従事致します。何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学の博士後期課程の肩書を持ったまま京都を離れ、オランダに向かったのは 2015 年 8 月のことでした。8 年近く前のことになります。もう 8 年も経つのか、という気もすれば、まだ 8 年しか経っていないのか、とも思えます。私は修士になるときに大阪大学から京都大学に移ってきたので、渡蘭前に京都で暮らした期間は 3 年半しかありません。3 年半とはいっても、先生方・先輩方・後輩たち、そして同期たちと、研究（やそのほかのこと）について時間を忘れて語り合った濃密な 3 年半でした。京都を離れた後、2015 年 9 月から 1 年半の間、京都大学の博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC1 としてオランダのユトレヒト大学で客員研究員を務めました。2017 年 4 月からの 2 年間は、オランダのティルブルフ大学で博士号取得候補者として研究を進め、2019 年 3 月に同大学で博士号を取得しました。帰国した同年 4 月からは、日本学術振興会特別研究員 PD、そして 10 月からは同 CPD（国際競争力強化研究員）として、合計 1 年半の間、東京の武蔵大学でお世話になりました。その後、学振特別研究員 CPD の肩書を持ったまま、2020 年 9 月からの 2 年間はユトレヒト大学で、2022 年 9 月からの半年間をイギリスの UCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）で、それぞれ客員研究員としてポスドク研究を続けました。海外には合計 6 年間住んでいたことになります。海外での研究生活の中で、西洋史学とはなにか、非西洋人が西洋史を語るとはどういうことなのか、ということについて、それまで以上に深く考えるようになりました。

研究テーマは近世オランダ宗教社会史です。オランダ共和国における複数宗派共存を、政治＝宗教的マジョリティである改革派プロテスタントの統治戦術だけでなく、カトリックのような政治＝宗教的マイノリティの生存戦略の観点からも分析しようと試みています。直近では、博士論文に大幅な加除修正を施した英語単著 *Catholic Survival in the Dutch Republic: Agency in Coexistence and the Public Sphere in Utrecht, 1620–1672* (Amsterdam: Amsterdam University Press) をようやく出版することができそうです。加えて、4 年間のポスドク研究の成果も徐々に形にしようとしています。例えば、今年・来年は、「ユトレヒト教会分裂」と呼ばれる出来事の 300 周年にあたり、それに関連した論集 *Lay Agency in the Context of Ecclesiastical Crisis: The Case of the Utrecht Schism (1723/1724)* (仮題 Leiden: Brill) の編纂に、編者・寄稿者の 1 人として関わっています。ユトレヒト教会分裂とは、オランダ共和国において、ローマ・カトリックとジャンセニストが袂を分かち、前者のインターナシ

ョナルな影響力を排除することを条件に、後者がオランダ政府に公認され、ナショナルなカトリック教会を設立する契機となった出来事を指します（これに関しては 2023 年度後期の特殊講義でも扱う予定です）。今後は、自らの研究対象を近世世界の中に位置づけ、比較することにも、これまで以上にチャレンジしていこうと思います。そうした方向性の共著論文を幾つか準備中ですし、講義や演習を通じて学生の皆さんとともに、近世ヨーロッパとはなにか、といった大きな問題にも取り組んでいこうと考えています。また、日本語での研究成果発信も、より積極的に行うつもりです。近いうちに、日本語で単著を執筆する計画をたてています。

西洋史学専修は学生時代の私にとって、歴史について自由闊達に何でも語り合うことができる、かけがえのない場所でした。先生方・先輩方が築いてこられた、この貴重な空間を守り、よりよく発展させていくことに誠心誠意取り組んで参りたいと思います。京都の素晴らしい環境の中で、先生方や学生の皆さんから学び、そして切磋琢磨していくことができることに、とてもワクワクしています。まだまだ未熟者ではありますが、研究・教育・学務のそれぞれにおいて精進して参ります。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。